

朝鮮人民の決起と連帶

すでに二回にわたって述べてきたように、今朝鮮人の闘いは、南北部における相次ぐ労働者・農民の決起、民主主義国民党連合の結成に見られるように大きな前進をとげている。南部の民主革命への前進、北部における社会主義建設根拠地化、それと一体となつた自主統一の闘いは、着実に日・米帝を追いつめている。

われわれは、こうした朝鮮人民の闘いの前進のなかで、これと連帯し、運動しうるプロレタリア國際主義の内実が鋭く問われていることを見なければならない。そしてこうした朝鮮人民のいくつかの歴史的事実について根本的な総括をせまられているのである。

その第一は、七〇年七・七華青闘告発である。一九七〇年七月七日、「蘆溝橋事件」三十三周年集会の組織化の過程で、七月四日、華僑青年闘争委員会の、七・七集会実行委から抗議退席、抗別宣言が日本の革命的左翼に向かって投げかけられた。

彼らは次のように述べている。

「出入国管理法案の十二月国会上程をひかえ入管闘争が今までなくクローズ・アップされ、その中で入管『決戦』なる華々しい方針?」が強固に提出され、そして『決戦』として入管闘争が、今にも『闘われ』ようとしている。彼等は、在日外国人の總ての送還を、いや一部の送還をでも阻止しようとする展開を具体化したうえで決戦を語っているのだろうか。そうではなく單なる祭りのかけ声として花から花へと飛び回る蝶よろしく入管闘争へとびつき、『決戦』をアジテートの常套手段として振り回し他人を驚かせているだけならば、その戦術主義ははつきりと犯罪的であり、入管体制解体など思いもよらない「このようなセクト主義は、すべての被抑圧民族に対する重大な裏切りばかりでなく地道な真剣な入管闘争を取り組んでいた部分に対する大きな障害物である」その様な決戦の闘争過程が入管闘争の壊滅過程となつてしまわないかと私は相憂する。日本共産党的様な部分が指導する闘争は常にその様な結果をもたらしてきた。「ひとたび『決戦』が終れば彼等は古いされたシャツを捨てるように入管闘争から去つていくかも知れない」(底流二号)

革命的左翼内部に孕まれた抑圧民族特有の、被抑圧民族人民の闘いの独自的存在に対する無知、さらには民族差別の酷酸な現実との日常不断の対決に対し、さまざまスローガンのおじけによる「左翼」的粉飾と、セクト的利用主義

に対し、華青闘は、自己の闘いの独自性をもつて強くこれを拒絶したのである。われわれは、この華青闘の告発、日本新左翼への不信と批判が全面的に正当であり、同時に今なお問われている問題であることを確認しなければならない。

戦後の朝鮮人民の決起

上でも、戦後間もなくの在日朝鮮人民の戦闘的決起と、それに対する日本共産黨のあやまりについて言及しておく必要がある。

一九四五八年五月十五日以後、もっとも早く公然たる闘いを開始したのは、朝鮮人労働者であつた。十月七日には、夕張、常盤炭鉱で朝鮮人労働者が、また三池炭鉱、足尾銅山では中国人捕虜が暴動的ストップをもつて決起し、この闘いは多く日本人労働者にも波及し、組合結成へと至った。また九月には在日朝鮮人学生同盟、十月十五日には「在留同胞の権益の擁護とその生活向上を期す、日本帝国主義と封建的残滓を清算し、新朝鮮建設に貢献す」というもとに、在日本朝鮮人連盟(朝連)が結成された。

朝連は、朝鮮への帰國の援助と、朝鮮語学校の建設を大きな運動の軸とし、朝鮮半島の反米闘争が、今までなくクローズ・アップされ、その中で入管闘争が今までなくクローズ・アップされ、その中で入管闘争へとびつき、『決戦』をアジテートの常套手段として振り回し他人を驚かせているだけならば、その戦術主義ははつきりと犯罪的であり、入管体制解体など思いもよらない「このようなセクト主義は、すべての被抑圧民族に対する重大な裏切りばかりでなく地道な真剣な入管闘争を取り組んでいた部分に対する大きな障害物である」その様な決戦の闘争過程が入管闘争の壊滅過程となつてしまわないかと私は相憂する。日本共産党的様な部分が指導する闘争は常にその様な結果をもたらしてきた。「ひとたび『決戦』が終れば彼等は古いされたシャツを捨てるように入管闘争から去つていくかも知れない」(底流二号)

二八日までに全国で一九七三人が逮捕されると、ついで言及しておく必要がある。

第一に、この華青闘告発をより深化していく上でも、戦後間もなくの在日朝鮮人民の戦闘的決起と、それに対する日本共産黨のあやまりについて言及しておく必要がある。

神戸基地司令官ビアーソン・メーハーが「非常事態宣言」を発し、九四三人が逮捕され、四月

を占拠して、果敢な闘いを展開、これに対し、

第一回にわたりて述べてきたように、今朝鮮人の闘いは、南北部における相次ぐ労働者・農民の決起、民主主義国民党連合の結成に見られるように大きな前進をとげている。

われわれは、こうした朝鮮人民の闘いの前進のなかで、これと連帯し、運動しうるプロレタリア國際主義の内実が鋭く問われていることを見なければならない。そしてこうした朝鮮人民のいくつかの歴史的事実について根本的な総括をせまられているのである。

その第一は、七〇年七・七華青闘告発である。

一九七〇年七月七日、「蘆溝橋事件」三十三周年集会の組織化の過程で、七月四日、華僑青年闘

争委員会の、七・七集会実行委から抗議退席、抗別宣言が日本の革命的左翼に向かって投げかけられた。

彼らは次のように述べている。

「出入国管理法案の十二月国会上程をひかえ

入管闘争が今までなくクローズ・アップされ、その中で入管闘争へとびつき、『決戦』をア

ジテートの常套手段として振り回し他人を驚か

せているだけならば、その戦術主義ははつきり

と犯罪的であり、入管体制解体など思いもよ

らない「このようなセクト主義は、すべての被抑

圧民族に対する重大な裏切りばかりでなく地

道な真剣な入管闘争を取り組んでいた部分對

する大きな障害物である」その様な決戦の闘争過程が入管闘争の壊滅過程となつてしまわないかと私は相憂する。日本共産党的様な部分が指導する闘争は常にその様な結果をもたらしてきていた。「ひとたび『決戦』が終れば彼等は古いされたシャツを捨てるように入管闘争から去つていくかも知れない」(底流二号)

革命的左翼内部に孕まれた抑圧民族特有の、

被抑圧民族人民の闘いの独自的存在に対する無

知、さらには民族差別の酷酸な現実との日常不斷

の対決に対し、さまざまスローガンのおじけによ

る「左翼」的粉飾と、セクト的利用主義

に対する「左翼」的粉飾と、セクト的利用主義

に対する「左翼」



カウツキーの社会

排外主義への転落

この文献は、プロレタリアートの革命的動員とインテナショナルの再建とを結びつけ、その基本的觀点および内容は、九年的インターナショナル大会で採択された『ブルジョア民主主義とプロレタリアートの独裁に関するテーゼ』に発展され、結実していく。

當時、一七年ロシア一〇月革命を皮切りとする国际命を日程にのぼらせ、労働者階級の現状の困苦を訴え、飢えと戦争からの救いをもとめる決起をもたらさずにいた。

一四年來の戦争は、いやがおうにもプロレタリア革

命を國際にのぼらせ、労働者階級の現状の困苦を訴え、飢えと戦争からの救いをもとめる決起をもたらさずにいた。

二年バーゼル宣言をうけつぎ、戦争と帝國主義の恐

怖から救われる誰の一途、ブルジョア階級独裁の打破

・プロレタリアートの独裁をロシアに樹立したのである。

一八年以降のヨーロッパにおけるプロレタリア革命の高まりは、かかるロシア革命を実現した力に支えられ、またこれと連動して急速な高まりをとげつた。しかしそこには、一八年初頭のドイツ・オーストリア労働者階級の相呼応した闘いが示すように、大規模な大衆ストライキが決行されつつも、これを指導すべきマルクス主義者は、まだ確固たる影響力を行使する勢力たりえずいた。レーニンが指摘する通り「ヨーロッパの最大の不幸と危険は、そこに革命がないことである」、そういう状態だったのである。

だから、革命的大衆運動と革命運動は、萌芽のうちに窒息させられ、分散と一時的な後退を余儀なくされていたし、ヨーロッパの労働者階級の圧倒的多数は、まだ第一インターの排外主義、日和見主義の影響下にどまっていたのである。

したがって、第一インターの排外主義、日和見主義との闘いは、プロレタリア革命とインターナショナルの再建にとって第一の前提条件をなしていた。とりわけバーゼル宣言を裏切ったカウツキーとの論戦は、マ

この文献は一九一八年一〇月一月にかけ、ちょうどロシア一〇月革命を序曲とするヨーロッパ革命の息吹きを背にして執筆された。その主題は、レーニンが序文で指摘するように同年八月、カウツキーが執筆した小冊子『プロレタリアートの独裁』を検討することにあてられている。レーニンは、ここで第一インターの完全な破壊を徹底的に暴く。

露する。

ルクス主義の根本命題を問う分水嶺だったものである。

レーニンは、『国家と革命』のなかで、こうしたカウ

ツキーの理論的誤りについて詳しく展開し、その根本

が、マルクスの國家学説、とりわけプロレタリアート

の独裁の問題に対する日和見主義的歪曲そのものであ

ることを暴露してきた。

そしてひとたび戦争が革命を促し、プロレタリア革

命がはじまる、彼の背教者としての正体は、実践を

めぐり具体的にあらわされる見えない。すなわち、プロ

レタリア革命が始まり、プロ独を実際に準備するこ

とが要求されたとき、「マルクス主義者」カウツキーは

もとよりこの命題が、マルクスのプロレタリアート

の国家に対する態度を言い尽したものであることは言

うまでもない。この点について周知のようレーニン

は、『国家と革命』で詳しく論じ、マルクスがコムニユ

ーンの当時、クーゲルマンにて手紙を怠慢に入れ

て、「この『官僚的、軍事的国家機構を打ち碎く』とい

う言葉には、革命における国家にたいするプロレタリ

ーと勤労被摺取大衆にいわゆる「純粹民主主義」を

とすると命題を、断固として強調するのである。

カウツキーはまるでブルジョアジーがプロレタリア

ーを拒否し、自分が暴力革命を拒否していることをかく

革は、平和的に、すなわち民主主義的な方法で」と革

命の平和移行論を唱えるのである。それは「暴力革命

を拒否し、自分が暴力革命を拒否していることをかく

ため」のペテンであるのだ。

すなわち、こうである。マルクスは一八七一年にお

いて、イギリスやアメリカでは「できあいの国家機構」

の破壊という前提条件がなくとも革命は実現される

という見解をもつていたというのである。周知のよう

放棄して多数を占める被摺取者の決定に服するかのよ

うに、ブルジョア階級には資本が労働を弾圧する

ためのいかなる国家機構もなかたし、いまもないか

のよう、見せかける詭弁をやつてのける。そして「変

革は、平和的に、すなわち民主主義的な方法で」と革

命の平和移行論を唱えるのである。それは「暴力革命

を拒否し、自分が暴力革命を拒否していることをかく

革は、平和的に、すなわち民主主義的な方法で」と革